

1855年安政江戸地震火災の出火点詳細調査

株式会社 防災情報サービス* 中村 操

公益財団法人 地震予知総合研究振興会† 松浦 律子

東京大学地震研究所‡ 大邑 潤三

Detailed survey of the fire starting points after the 1855 Ansei Edo earthquake

Misao NAKAMURA

Information Service for Disaster Prevention, Miroku-cho 230-7, Sakura,
Chiba, 285-0038 Japan

Ritsuko S. MATSUURA

Association for the Development of Earthquake Prediction
Chiyoda Build. 1-5-18 Kanda-Sarugaku-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 101-0064, Japan

Junzo OMURA

Earthquake Research Institute, Univ. of Tokyo
1-1-1 Yayoi, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0032, Japan

Fires in the city of Edo by the Ansei Edo Earthquake in 1855 have been assumed to be originated from about three-dozen locations. In this paper, we were able to identify 65 fire origins as a result of detailed comparisons of information from three reliable historical documents, in addition to the information we had obtained from many other historical materials. Combined with five or more isolated burned areas whose origins of fires are not revealed in this study, there must be more than 70 fire origins after Ansei Edo earthquake. It has been believed that the earthquake caused little fire damage, because it did not occur during the cooking time, and the winds were light that night. However, we must not forget that this earthquake occurred at night of the winter season. Even it was November, the climate condition was colder than today. The earthquake occurred in the political capital in tense over the opening of the country. In such capital, a rather large number of feudal lords and citizens were active late into the night. They have overlooked that not only candles and oil lamps, but many braziers used for warmth caused many fires, after wooden houses collapsed on them. It should not be forgotten that behind the fact that the area burned down in this earthquake was only 1.5 km², there were many efforts in initial fire extinguishing that were not defeated by collapsed houses at night.

Keywords: Ansei Edo Earthquake, Fire in Edo city, Seismic Intensity, Fire origins

§1. はじめに

安政江戸地震は安政二年十月二日(1855年11月11日)夜四時(不定時法変換で21:21に相当)過ぎに発生した。震源は東京湾北部、地震の規模はM7程度であった。江戸および東京を襲った直下の地震としては、最大の被害を与えた。地震の後火災が発生し、7,000人を越す死者を出した。火災による焼失面積は1.5 km²[中村・他(2005)]。地震当日の気象は、午前小雨、午後には止んで夜はわずかに風が

吹いていた。夜遅いということから、釜戸の火を使う時間帯ではなかったが、暖房の火鉢や行燈などの照明は使われていた。

火災の出火点数については、同時代史料として、『小見川藩仙台陣屋日記』の地震4日後の条に「去ル二日江戸表大地震二而大火二相成り九分通焼失、火口は三拾四ヶ所ニも相成焼候趣 白川行之者罷帰リ噂之由」とある。一方斎藤月岑は自身の著『安政乙卯 武江地動之記』で「町方火元口(ママ)箇所なり、

* 〒285-0038 佐倉市弥勒町 230-7 電子メール:misao@ba2.so-net.ne.jp

† 〒101-0064 千代田区神田猿楽町1-5-18 千代田ビル 8F 電子メール:matsuura@adep.or.jp

‡ 〒113-0064 文京区弥生 1-1-1 電子メール ohmura@eri.u-tokyo.ac.jp:

武家を合すれば五十ヶ所六十ヶ所にも餘あるへし」と述べている。

後代では、例えば大正期の建築家・大熊(1924)は大正関東震災の4ヶ月後に行われた講演会で『安政の地震火事と大正震火災』と題し安政に関して、「発火の場所は何箇所あったかと云いますと、(中略)其の実際は三十六箇所位であると想像されるのであります」と述べている。また日本被害地震総覧[宇佐美・他(2013)]では、「地震後30余ヶ所から出火し焼失面積は2町(0.22km)×2里19町(10km)に及んだ。幸いに、風が静かで大事に至らず、翌日の巳刻には鎮火した」とある。巳の刻は午前9時25分に当たる。夜通しほぼ12時間燃え続けたことになる。

地震の後、江戸市中での火口は三十数箇所、と噂されたようである。その数値が現代まで訂正されず残った。中村・他(2005)は焼失面積を精査して1.5km²と求めたが、今回は江戸市中の各焼失域の出火点を求めた。また、大名小路(現在の大手町から日比谷公園)については、出火、延焼、焼失の流れを調べた。大名家および町方の消火活動や、火除地としての広小路は役にたったのかといった点にも目を向けたい。

§2. 用いた史料

主に付表1の30史料を用いたが、火災情報の信頼できる主な三史料の概略をまず紹介する。

表1. 65ヶ所の出火点の場所
Table 1. 65 origins in 49 areas of fire

No.	Int.	現代の地名	出火点(江戸期の地名)	No.	Int.	現代の地名	出火点(江戸期の地名)		
C-1	6.0	千代田区	大手町	T-11	5.5	台東区	上野3丁目	上野町一丁目 3	
C-2	6.5		皇居外苑	T-12	6.0		池之端1丁目	下谷茅町 2	
C-3	6.5		丸の内2丁目	T-13	6.0	池之端2丁目	池之端七軒町		
C-4	6.5		日比谷公園	A-1	5.5	荒川区南千住7丁目	小塚原町		
C-5	6.5		日比谷公園	S-1	5.5	墨田区	向島1丁目	南本所元瓦町	
C-6	6.5		内幸町2丁目	S-2	6.0		吾妻橋1丁目	中之郷竹町	
C-7	6.5		神田神保町・他	S-3	6.0		東駒形2丁目	北本所荒井町	
Cu-1	6.5	中央区	日本橋浜町	S-4	6.0		東駒形1丁目	北本所番場町	
Cu-2	5.5		新川1丁目	S-5	6.0		石原2丁目	南本所石原町	
Cu-3	6.0		明石町	S-6	6.0		太平1丁目	中之郷出村町	
Cu-4	5.5		京橋2丁目	S-7	6.0		緑1丁目	本所緑町一	
M-1	6.5	港区	新橋2丁目	S-8	6.0		緑3丁目	本所緑町三・五丁目・花町 3	
M-2	6.0		東新橋2丁目	S-9	6.0		緑4丁目	本所入江町	
B-1	6.0	文京区後楽2丁目	小石川隆慶橋 野中家	S-10	6.0		立川4丁目	本所徳右衛門町	
T-1	6.0	台東区	千束4丁目	K-1	6.0	江東区	新大橋2丁目	御船蔵前 2	
T-2	6.0		花川戸1丁目	浅草寺地中	K-2		6.0	新大橋3丁目	深川六間堀町 2
T-3	6.0		今戸2丁目	橋場金座下吹所 2	K-3		6.0	森下1丁目	森下町 2
T-4	6.0		今戸1丁目	今戸町	K-4		6.0	常盤2丁目	深川常盤町
T-5	5.5		下谷2丁目	下谷坂本町三丁目	K-5		6.0	清澄2丁目	深川伊勢崎町
T-6	6.0		松ヶ谷	龍光寺門前	K-6		6.0	冬木	深川亀久町
T-7	5.5		元浅草4丁目	行安寺門前	K-7		6.0	富岡2丁目	永代寺門前東仲町
T-8	5.5		寿2丁目	浅草八軒町 玉宗寺	K-8		6.5	門前仲町・他	永代寺門前町・他 3
T-9	5.5		駒形1丁目	駒形町	K-9		6.0	永代1~2丁目	深川熊井町・他 4
T-10	6.0		蔵前2丁目	三好町	K-10		6.0	亀戸2丁目	亀戸町
				K-11	6.0	亀戸6丁目	中之郷五之橋町		

複数の火元は末尾にアラビア数字で示した。Int.欄は中村・松浦(2011)の震度。

Multiple fire sources are indicated by Arabic numerals at the end." Int." column indicates seismic intensity from Nakamura and Matsu'ura (2011).

『安政地震焼失図』[以下付表1に従い(d)と略記]

地震後、江戸市中の焼失区域を23枚の絵図にまとめたもの。作業は北町奉行井戸対馬守の元で行わ

れた。絵図役6名、町年寄喜多村彦右衛門、同樽藤左衛門、同館市右衛門の手代など総勢16人が地割役などを分担して調査した焼失域を図示し、出火見

分絵図を作成した。41 箇所の出火点を示してあるが、これが出火点の全てではない。火災史料としては最も詳しい。現存する写しは東京大学地震研究所(1985)の底本である神宮文庫蔵本、江戸東京博物館蔵本、さらに国立国会図書館の古典籍史料にある、明治期の近世史料書写集『地災撮要』巻八、の3つある(付録1)。本稿ではこの3種を比較して焼失状況などの検討に用いた。但し図2,4,5,6では方位等を元史料の図の状態に図化しており、距離や方位は現代の地図のように正確ではない。火災の検討に関わる3種の写本の差異は表2にまとめた。

『安政乙卯 武江地動之記』[以下で(c)]

著者斎藤月岑は、江戸時代後期から明治時代初期にかけての江戸・東京の町人。通称は市左衛門、諱は幸成、月岑は著述等の際に用いた号である。居住町である雉子町のほか、三河町三丁目・同裏町・四丁目・同裏町・四軒町の町名主をつとめた。江戸の地誌や風俗に関する『江戸名所図会』、『東都歳事記』、『武江年表』など数々の書物を著した文化人としての活動がよく知られている(東京大学史料編纂所, 1996)。この安政江戸地震の被害についても、自身の見聞と聞き取り情報を正確且つ詳細に記述している。

現存する写本には国会図書館蔵本、タイトルが『東都地震記』と異なるものの、内容がほぼ同じ東京都立図書館蔵本[以下都立図書館蔵本, e.g. 松浦・中村(2023)]がある。活字翻刻版としては、底本が不明な大正期のもの[江戸叢書刊行会(1917)]と都立図書館蔵本が底本[森嘉兵衛(1970)]の関谷・後藤(1970)によるものがある。本論では、底本と校訂が明瞭で翻刻の信頼度が高く、底本をネットでも閲覧可能である点から(c)に関しては全て関谷・後藤(1970)を利用した(付録2)。但し、地震史料集の方が読者利用に簡便であるので、付表2では武者(1951)の頁数で相当情報の該当箇所を示してある。

『破窓の記』[以下で(γ)]

著者城東山人は日本橋西河岸町に住む家主。本名岩本左七、文筆をたしなみ風俗随筆叢書『燕石十種』を編んでいる[e.g. 野口(1997)]。本人は本郷の酒屋大坂屋藤兵衛の息子と称している。地震直後から被災地を歩き、被害状況や火災の出火点などを精査している。内容も他の地震記とよく整合している。

§3. 江戸市中の火災の発生と焼失

既報[中村・他(2005)]において、焼失面積を詳しく求め焼失域を地図上に示した。その後の安政江戸地震の解析などで出火点と分かった地点や人については収集していたが、今回は北町奉行所の火災調査(d)の図面から判ることを基本として、さらに既報で抜けていた焼失域(表1のM-1)も追加してそれぞれの

火元を検討した。

十月の月番奉行は南町奉行で、北町奉行は非番であった。このような状況で調査が行われていた。また、個人としての調査には城東山人(γ)や斎藤月岑(c)がある。これらは江戸市中全域ではなく、また文字史料であるが、補足資料としては貴重である。これら三史料を基本として、必要に応じて付表1の史料も使い、江戸市中の火災の焼失域と、判明した65出火点をまとめて、表1および図1に示した。

図1(口絵)の橙色の領域は焼失域、黄色い星印は出火点が判明したものである。一箇所に複数の出火点が判明している領域がある一方で、延焼や飛び火とは考え難いのに出火点の星印が無い焼失域が5群以上存在する。これらは火元の情報がなかった領域である。これらに一箇所ずつの出火点があったと考えれば、70箇所以上火元があったことになる。

尚、大名小路(千代田区)については大名家の日記などを複数照合すると、延焼の過程も大凡分かるので、詳しい検討を4章で行う。以下の議論で焼失面積は中村・他(2005)を参照した。推定震度は中村・松浦(2011)から出火点に近い地点の値を表1に示した。以下の文章でゴシック体は史料記述を示す。それぞれの史料は付表1の最左列の記号で示した。

3.1 中央区の焼失域と出火元

中央区内は震度5.0~5.5の地点が殆どで、極一部の地点で震度6.0であったためか、出火点数も少なく、Cu-4以外は焼失域が広くない。

日本橋浜町2丁目(地図上の記号Cu-1):浜町の水野出羽守中屋敷(駿河沼津藩)の火災について(m)に「水野出羽守殿(中略)且又浜町中屋敷之儀は住居向ニヶ所潰、其外家中長屋向皆潰之内潰家方出火二而、長屋三棟土蔵ニヶ所焼失」とある。(d)に屋敷内に焼失範囲と「燃立」の記述とがあり、上記史料と整合する。長屋と土蔵が焼失したことが分かる。

京橋2~3丁目(Cu-4, 南伝馬町・他):商人の町であり、土蔵の崩壊が多く発生した。火災も二ヶ所から起こり、広い面積が焼失した。焼失面積は0.15 km²。その原因は建物の倒壊を恐れて住人が逃げたことにある。(γ)は「斯る変事に依て人にはからずも家を捨て 退きのがれたる後に あやまちて家より火の出るものは、おのづから皆家主の罪を得るもの也 さればすべて家主をもてこゝに火元とす」と出火の責任を断罪している。

尚、東京大学地震研究所(1985)ではCu-4の出火点の一つは河岸地に打たれている。前述の3種を比較した結果、この出火点は神宮文庫蔵本の複写を使った際に、史料の虫喰いを出火点と誤認したものと判断した。その他の差異も表2にまとめてある。但し出火点として(γ)に家主が二人挙げられているので、出火点数は2のままである。



図 1. 江戸市中の地震火災の焼失図(橙色)と出火点(黄色星印). [中村・他(2005)に加筆].
 背景の現代の陰影起伏図には区境(茶破線), JR 東日本の路線(青線)と主な駅(灰色多角形)も示した.
 Fig. 1. Map of burned areas (orange) and locations of fire origins (yellow stars) in Edo city after the earthquake.
 The ward-boundaries (brown single dotted lines), JR East railways (blue lines) and major stations (gray areas) are also shown on the background map of the present elevation topography.

3.2 港区の焼失域と出火元

港区の埋立地は当時は無く、震度が大きくなる低地

部は狭かったので、焼失域も狭く、出火点も少ない。

新橋 2 丁目 (M-1, 兼房町): (d) は十間以下として焼

失域を示していない。(γ)には「兼房町、松平兵部殿屋敷共一口也。缺火元」とある。(c)は「兼房町の自身番屋潰たるより出火して隣なる松平兵部殿御屋敷へ少々焼込、兼房町は大方潰たり。」とやや詳しい。この記述から出火点および焼失域を新たに追加した。焼失面積の詳細は不明で御屋敷への延焼程度にもよるが、0.01 km²未満と推定した。

東新橋 2 丁目 (M-2, 柴井町): 町内町屋のほぼ全域と宇田川町の一部が焼失(d)。(γ)に「柴井町月行事房吉、火元一口也」とあり、房吉の家が火元とされる。月行事(がちぎょうじ)とは「町内の地主、家持が毎月交代で五人組ごとに選ばれ、自身番屋で町政事務を行った」[小学館(1994)]とある。十月の役であった房吉の家から出火したことがわかる。

3.3 文京区の焼失域と出火元

後楽 2 丁目 (B-1, 隆慶橋辺): 文京区で唯一火災の発生した場所。武家屋敷 5 軒が焼失した。(d)には小石川辺、清水御用人野中哲太郎に出火点の黒丸印がある。

一方で、水戸藩上屋敷(後楽 1 丁目)では奥女中西宮秀のとっさの判断で、火災の発生を抑えることができた。地震の収まった後「御殿へ引き返し 御手あぶり 御あため 火鉢など火の本あぶなくそのまま御泉水へ投げ込み 金魚や緋鯉はふびんに思うけど 致し方ない」『落葉の日記』[北小路(1979)]と言う行動に出た。水戸屋敷からは、長屋の倒壊により二人の重鎮、戸田蓬軒と藤田東湖が死亡した。屋敷内の被害などから震度 6.0 以上が推定されている。大きな揺れに襲われたが、文京区からは先の隆慶橋付近が焼けただけで済んでいる。

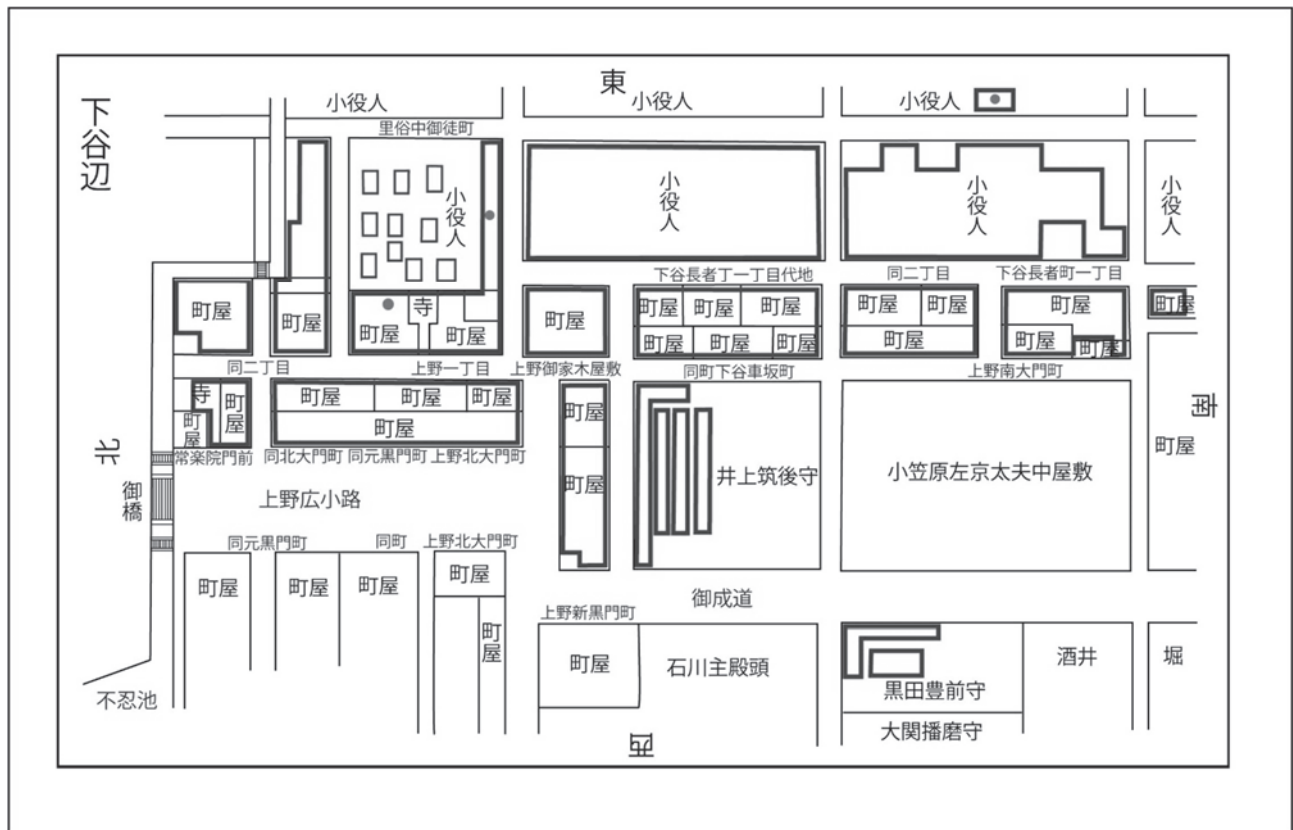


図 2. 下谷辺の火災の状況。(太枠: 焼失域, 丸印: 出火点)

上野広小路は火災の延焼を防いでいるように見える。[(d)に本文の 3 出火点追記]

Fig. 2. Fire in Shitaya region. (Thick box: burned area. Closed circle: three origins of fire)

Ueno-Hirokoji square appears to prevent the fire from spreading to west. [Added to the traced map of (d)]

3.4 台東区の焼失域と出火元

台東区域は上野の山以外は震度 5.5 以上、6.0 の地点も多く、焼失域も広く出火点も多かった。

千束 4 丁目 (T-1, 新吉原): 新吉原では二つの史料が地震以前に火災があったと記している。新吉原は震度 6.0 以上の揺れがあり、建物の倒壊から新たな

火災が発生し、大きくなったものと考えられている。これによって、大門の内側ほぼ全域が焼失(d)となった。

蔵敷村(東大和市蔵敷)の名主内藤左衛門の日記(δ)には「火之番人四ッ時之拍子木打鳴し時を報し候塗炭ニ火事と呼声聞付候間、火之見へ登り見候処、浅草向ふ吉原町と所々之火の見二而、半鐘

打なから呼下二付下り、先安心と申、四ツ時二付見世之者へ寝二付へしと申掛ヶ候折、北東之方二当り大筒之音二ひとしき声響キ渡り、上方下へ落る如く震動いたし候間、是は地震なり。」とあり、この時左衛門は仕事で日本橋橋本町の定宿津久井屋新三郎にいた。火事に気づき火の見に登り吉原の方向であることを確認し、やや遠い火事、先ず安心と思ったところに大筒のような地震が襲ってきた。時間的経緯から火事は地震前に起こっていたことが分かる。因みに、里正とは名主を意味する。

(b)にも「吉原町は地震より少し前に大門内に火の事あり、引つゝきて地震火事にてにくる事あはず」とある。この記録の著者宮崎成身は牛込神楽坂下に住む旗本である。直接火災を確認したわけではなく、後で得た情報であろう。

(γ)には出火箇所を「新吉原五ヶ町、井五十軒 南側は残る、共、一口也、此火元江戸町二丁目家主松五郎、同町同幸吉兩人也」とある。焼失面積は約0.1 km²であった。

花川戸 1~2 丁目(T-2, 浅草寺地中):浅草田町から猿若町、浅草寺地中町屋、十八ヶ寺など含めかなり広く焼失(d)。(c)に「浅草寺地中より燃立、田町、山川町、花川戸町、猿若町焼失。凡長八町餘、幅貳町半程。」とあり、焼失面積は0.17 km²であった。(γ)は「此火元浅草寺地中家主小兵衛也」と記しているが、これだけ大きな領域が一ヶ所の出火元で焼失したのだろうか。今回は判明した1点のみ図1に示した。

下谷 2 丁目(T-5, 下谷坂本町):出火元は坂本町三丁目と共通であるが、(d)には「右兵衛店静安」、(γ)では「此火元参丁目五人組持居医師清庵也」とある。静安と清庵の違いは、どちらかが間違えて記したのであろう。焼失面積は約0.02 km²であった。

駒形 1 丁目(T-9, 駒形町), 蔵前 2 丁目(T-10, 三好町):浅草駒形町から浅草諏訪町までと、浅草三好町から浅草黒船町の町屋が焼失(d)。(γ)に「此火元駒形町家主亀次郎、三好町同彌兵衛」とある。T-9,10を合わせた焼失面積は0.04 km²であった。

上野 3 丁目(T-11, 上野町一丁目):(d)では、北は上野町二丁目から南は上野南大門町まで、町屋、役人居宅、大名屋敷の一部が焼失であるが、出火点はない。一方(γ)に「下谷南大門町、北大門町、同所同朋町、同長者町壱丁目、同貳丁目、同所常楽院門前、下谷町壱丁目、上野町、総而一口、火元上野町家主與兵衛也」とある。焼失域は(d)と同一である。(c)には3箇所分散しているが「上野町壹丁目裏森川久右衛門殿組御徒士組やしきより出火」「凡長六町半餘幅平均壹町十間程。」「下谷仲御徒町なる東側御手先美濃部八蔵殿(中略)火起こり」とある。これら3出火点を図2に落とすと、2箇所は焼失域の北寄りである。美濃部宅以外にも南大門町や長者町

の南側に他の出火点もあった可能性もあるが、今回は判明箇所のみとした。焼失面積は0.11 km²であった。

池之端 1~2 丁目(T-12 下谷茅町, T13 池之端七軒町):(d)には下谷茅町一・二丁目町屋焼失、二丁目町屋北南に黒丸印、池之端七軒町、清左衛門店松蔵に黒丸印が示されている。(γ)に「下谷茅町壹丁目、貳丁目、池之端七軒町、講安寺門前、稱仰院門前、其外門前地五六ヶ所、総而一口、此火元茅町壹丁目家主清兵衛、同貳丁目同金七、池の端七軒町同清左衛門、右三人也」とある。(c)には「下谷茅町二丁目より燃立最寄武家焼失 池の端七軒町より燃立 凡長二町半餘 幅平均四十五間程。」とある。不忍池近くの町屋3ヶ所から出火。焼失面積は0.025 km²であった。

3.5 荒川区の焼失域と出火元

南千住 7 丁目(A-1, 小塚原町):小塚原町の百姓町屋を焼いた。(d)には黒丸が三ノ輪町飛地にある。「凡長壹町半餘、幅平均五十間程」(c)が焼失。焼失面積は約0.02 km²であった。地震の揺れは震度5.5程度と推定されている。

3.6 墨田区の焼失域と出火元

墨田区域は殆ど震度6.0以上であるが、出火点もS-1以外は震度6程度であった。

東駒形 2 丁目(S-3, 北本所荒井町):(d)は北本所荒井町北端に黒丸印で、町屋が飛び飛びに焼失した。

東駒形 1 丁目(S-4, 北本所馬場町):(d)は北本所番場町北端に黒丸印があり、町内の町屋が焼失した。

緑 1 丁目(S-7, 本所緑町一丁目):(d)には一丁目に1ヶ所黒丸がある。

緑町 3 丁目(S-8, 本所緑町三~五丁目・同花町):(d)で二丁目は焼けず、三丁目から花町まで東西に延びた堅川通に沿った町屋が連続して焼失している。(γ)にはS-8の家主4名の火元がある。(d)にはS-9の本所入江町にも黒丸がある。堅川(たてかわ)の対岸の立川4丁目(S-10, 本所徳右衛門町)にもS-9から堅川を越えた本所徳右衛門町一丁目、二丁目の町屋が焼失しているが、(d)に出火点は示されていない。(γ)に「此火元二丁目家主與兵衛也」とある。S-7~10の焼失面積合計は0.05 km²であった。

3.7 江東区の焼失域と出火元

江東区域も殆ど震度6.0以上の地点が多いが、出火点が多数ある広い焼失域の連なりが目立つ。

新大橋 2~3 丁目, 森下 1 丁目(K-1, 御船蔵町, K-2, 深川六間堀町, K-3, 森下町):この地域は狭い町内に深川六間堀町が大きく占める。(d)ではこの3町の殆どが焼失し出火点は4ヶ所ある。(γ)には各町2名ずつ計6家主が火元とされる。K-4も含めた焼失面

積は 0.11 km²であった。

常盤 2丁目 (K-4, 深川常盤町) : (d)には焼失域は示されているが、出火点はない。(γ)に「深川常盤町壹丁目、二丁目、一口也、缺火元」とあることから、K-4として図 1 に示した。

清澄 2~3 丁目 (K-5, 深川伊勢崎町) : (d)は深川伊勢崎町町屋の西端に黒丸印、仙台堀に囲まれた同町の大部分と松平美濃守下屋敷の一部焼失である。

富岡 2 丁目 (K-7, 永代寺門前東仲町) : (d)は三十三間堂脇の町屋の一部焼失で、黒丸印がある。(γ)に火元は「東仲町金次郎」とある。

門前仲町 1~2 丁目 (K-8, 永代寺門前町・他) : (d)は永代寺門町、同山本町、同門前仲町の町屋の広範囲を焼失、出火 3ヶ所と記す。(γ)は「此火元永代寺門前町家主竹次郎、同町與兵衛、(中略)同所山本町同金平」としている。K-9 を含めた焼失面積は 0.14 km²であった。

永代 1~2 丁目 (K-9, 深川熊井町・他) : (d)は深川中島町他 7 町焼失である。出火元として深川大島町と同黒江町の町屋にそれぞれ黒丸印がある。(γ)にはもう 2ヶ所火元が加わり、「此火元熊井町家主利八、大島町同幸次郎、黒江町同善兵衛、蛤町同伊右衛門、右四人也。」とある。

§4. 大名小路の火災の動き

4.1 江戸城の施設

大手門前の腰掛については (q) に「御城内下乗腰掛潰出火二付消防 [] 出候様御徒目付を以御目付大久保右近□□御達御座候得共御屋敷出火二付消防御□□差出兼候趣御留守居上田左太夫御城当番所江罷出御徒目付森文八郎 [] 御届申上候」と記されている。酒井家(播磨姫路藩)は大手門前に上屋敷、添屋敷がある(図 3 の C-1)。日記には腰掛から出火と記録されており、消火の手伝いを依頼されたが、自家も火災でお手伝いを断っている。

和田倉御門内の大番所と腰掛について(i)は「和田倉御門内大番所やける 同所腰掛やける」, (d)では日比谷御門の大番所、山下御門内大番所が共に焼失している。

4.2 御曲輪内(大手町, 皇居外苑, 丸の内)

大手町 1 丁目 (C-1, 大手前)について(s)に「竜(たつ)の口角森川出羽守様焼る。大手前は酒井雅楽頭様やける、表御門残る。御向屋敷焼る。」(q)も「御住居辺方出火追々火勢 [] 御住居向并御殿向初御焼失御添屋敷□□御隣屋敷方出火不残御類焼尤御上屋敷表御門新御門御土蔵三ヶ [] 御住居御物見御茶屋并稲荷社銅御 [] 残申候」と記されている。図 4 に示すように添屋敷を含め三屋敷が焼けており、酒井家上屋敷の南西角の一部が残ったことが図面や日記から分かる。

(z)には「晴光院様御住居御口番之部屋に大火鉢有之、火を盛んにおこし置候処、右上江潰落候故出火二相成」とあり、将軍家斉の娘で酒井雅楽頭家第 18 代忠学に嫁して地震当時は先々代未亡人だった晴光院住まいの火鉢から出火している。当時養子が次々夭逝した酒井家に於いて、将軍の娘である未亡人で先代藩主未亡人の母である晴光院は、姫路藩にとって最も頼りになる存在として上屋敷に居り、暖房も贅沢に使っていたのが出火原因となった。

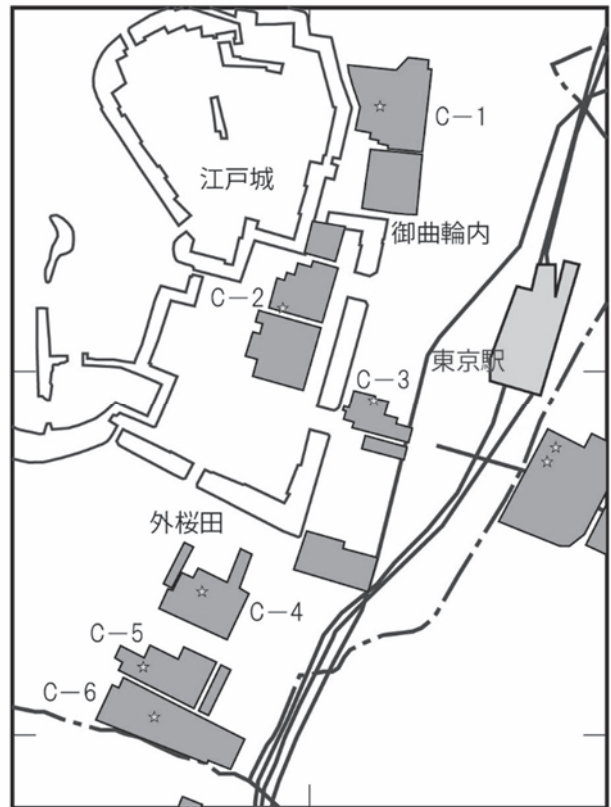


図 3. 御曲輪内から外桜田の焼失域。星印は出火点現在の東京駅と鉄道路線や区境も示した。

Fig. 3 The burned areas in the inside of Okuruwa and Outer-Sakurada. Stars indicate locations of fire origins. The present Tokyo Station, railways, and ward boundaries are also shown.

松平越前守家中屋敷(北側に隣接)についての同家史料 (h) に「一 地震後酒井雅楽頭殿方出火にて拍子木戸番所忝間に忝間類焼 一 御宮所々破損 一 御庭内稲荷社類焼」(α)に「大手酒井雅楽頭様御屋敷方出火森川出羽守様御屋敷御類焼」とあるように、酒井家上屋敷から出火、同家添屋敷に延焼し、さらに森川出羽守上屋敷までも燃やしてしまったことが分かる。酒井家北隣の松平越前守中屋敷でも番所と稲荷社が類焼したと記録している。このことは図 4 にはない。この中屋敷が晴光院と同様将軍家斉の娘で、春嶽より二代前の藩主未亡人である松楽院の住まいだったことから、幕府に配慮して仔細に報告した様である。

皇居外苑(C-2, 和田倉御門内)にあった松平肥後守(陸奥会津藩)及び松平下総守(武蔵忍藩)の火災について見てみよう。(m)には「松平肥後守殿 一和田倉御居屋敷御住居向長屋共相潰焼失内長屋三棟大破二而相残并御預屋敷皆潰焼失」, (α)には「松平肥後守様御屋敷方出火口口御添屋敷方松平下総守様、本多越中守様、本庄安芸守様御屋敷ノ不残御類焼」, 「内藤紀伊守様も御類焼と相見候得共本文ニ認無之」とある。実際は本多越中守(陸奥泉藩)と本庄安芸守(美濃高富藩)は火が入っていない。細川家の見誤りであろう(図4)。(i)に「和田倉御門内大番所同所松平肥後守様中やし記(添屋敷力共やける同所腰掛やける同南松平下総守様やける」, 内藤紀伊守上屋敷(越後村上藩)側からは(u)に「其内御隣(ママ)屋舗下総守様方出火 御屋舗御台子(ママ)并二御登城御門の辺より出火ニ相成」と松平下総守屋敷からの延焼と記しており, (α)と整合する。これらの記録から判断して, 火災は松平肥後守上屋敷から出火し, 同添屋敷, 松平下総守上屋敷へ延焼, さらに内藤紀伊守上屋敷の半分を類焼させた。

丸の内 2 丁目(C-3, 八代洲河岸)にあった松平相

模守(因幡鳥取藩)及び定火消屋敷そして遠藤但馬守(近江三上藩)について見てみよう。(k)に「御殿初御長屋向過半潰、其上北御長屋外内通共御類焼に付 殿様一旦日比谷御門外へ御立退被遊(中略)一火消御役屋敷より北表御長屋江火移り阿州様御人数操入相働候得とも火勢強御殿向風下ニ相成候折柄表御門前二町火消人足相見へ候二付隼人罷出消防申談候処池田播磨守様御組同心馬(カ)藤七郎と申者応答致し怪我人多竜吐水迄も損し(中略)相模守居屋敷過半潰、且又類焼仕候、并八代洲河岸添屋敷不残潰、其上類焼仕候」とある。(k)は鳥取藩士による自家の記録となる。ここで御殿とは鳥取藩添屋敷を指す。火は定火消屋敷からのもらい火で北表長屋が類焼(図4), 近隣の阿州様(徳島藩松平阿波守), 勘定奉行池田播磨守(屋敷は神田橋御門外)と町火消しの人手を借りて, 竜吐水は壊れてしまったが懸命に消火活動を行っている。あくまでも両家ともに自分たちは類焼, と主張している。(p)には大名小路遠藤但馬守様は不残焼失とある。八代洲河岸のこの一角は定火消屋敷からの火で焼けたと鳥取藩は言うが, ここでは(d)の出火点の松平相模守添屋敷を採用する。類焼経路は図4の矢印となる。

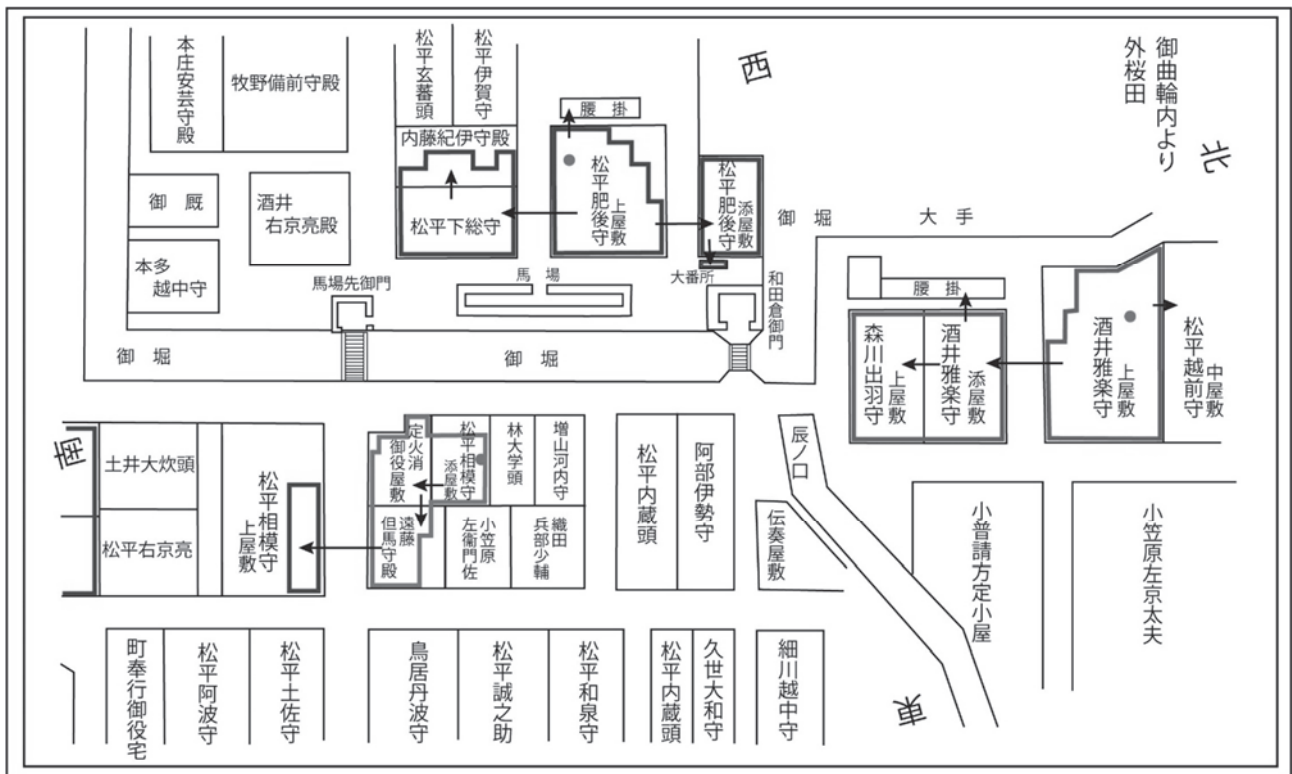


図4. 御曲輪内および外桜田辺の火災の状況-1

矢印は延焼方向を示す。他は図2と同様。

Fig. 4. The detail of burned areas around the inside of Okuruwa and the outer area of Sakurada gate-1. Arrows indicate the direction of fire spread. Other legends are the same as Fig. 2.

4.3 外桜田(有楽町, 日比谷公園, 内幸町)

有楽町 1 丁目(数寄屋橋御門内)にあった本多中

務大輔(三河岡崎藩)と永井遠江守(摂津高槻藩)の上屋敷も焼失している(図5)。「近辺方出火二而私

居屋敷類(焼脱力)仕候、此段御届申上候 以上 十月三日 本多中務大輔」(β), 「上 本多中務大輔殿上 永井遠江守殿 右住居向并内外長屋共皆潰其上焼失」(e) とあり, 本多家も永井家も出火元とは書かれていない。

また, 本多に隣接する土井大炊守上屋敷(下総古河藩)と松平右京亮上屋敷(上野高崎藩)は(m)に「一居屋敷住居向潰大破(中略)一長屋四棟潰一同三棟大破 一同一棟類焼」, (β)に「御居屋敷一表御門潰御玄関大破(中略)一稽古場并物置南之方隣境板塀不残類焼」と土居家も松平右京亮家も共に若干類焼をしている。この一角の出火点はわからないが, 焼失してしまった本多・永井両家のどちらからか, あるいはそれぞれ出火したと考えられる。しかし, 今回はこれ以上確実に火元を特定できなかったため, 出火点としては追加していない。

次に日比谷公園(C-4, 外桜田)にあった松平肥前守上屋敷(肥前佐賀藩)および松平大膳大夫上屋敷(長門萩藩)の火災を見る。細川家は(α)に「外桜田松平肥前守様(中略)屋敷不残焼失」, 佐賀藩支藩は(o)に「御本家二は地震甚敷ゆり倒し候上、火燃上

り候付死人凡四拾人程も有之」とある。佐賀藩本家の松平肥前守屋敷は全焼し被害甚大である。

(o)は「御焼失御近火御見舞御使者御便等今暁方段々差候出 左之通 御類焼 松平大膳大夫様 御近火 上杉弾正大弼様」(o)。火は本家である佐賀藩上屋敷から燃え上がり, 松平大膳大夫上屋敷が類焼し, 上杉弾正大弼(出羽米沢藩)上屋敷は火災を免れたと記している。これらの記録は(d)と整合する(図5)。

萩藩の記録で(f)に「鍋島境大番丁作事焼失、御厩ハ不焼及鎮火候由二而委曲不分二而候事」と, (y)に「上御屋敷の処鍋嶋様御屋敷内方之出火にて御作事固屋近辺の組固屋不残、大番丁東ヶ輪不残致類焼、其外御火災におみては別条無御座候」, 「猶土蔵内長屋皆潰の場所方出火に相成、内長屋焼失仕候」とある。鍋島(佐賀藩)家との境に近い作事小屋が類焼し, 内長屋の潰れた場所からは火の手が大きくなり, 焼失した。(y)には「外桜田松平大膳大夫居屋舗潰家方出火にて焼失仕候、尤類焼は無御座候得共」とあり, 自分たちの出火は他の屋敷に類焼させなかったと安堵している。

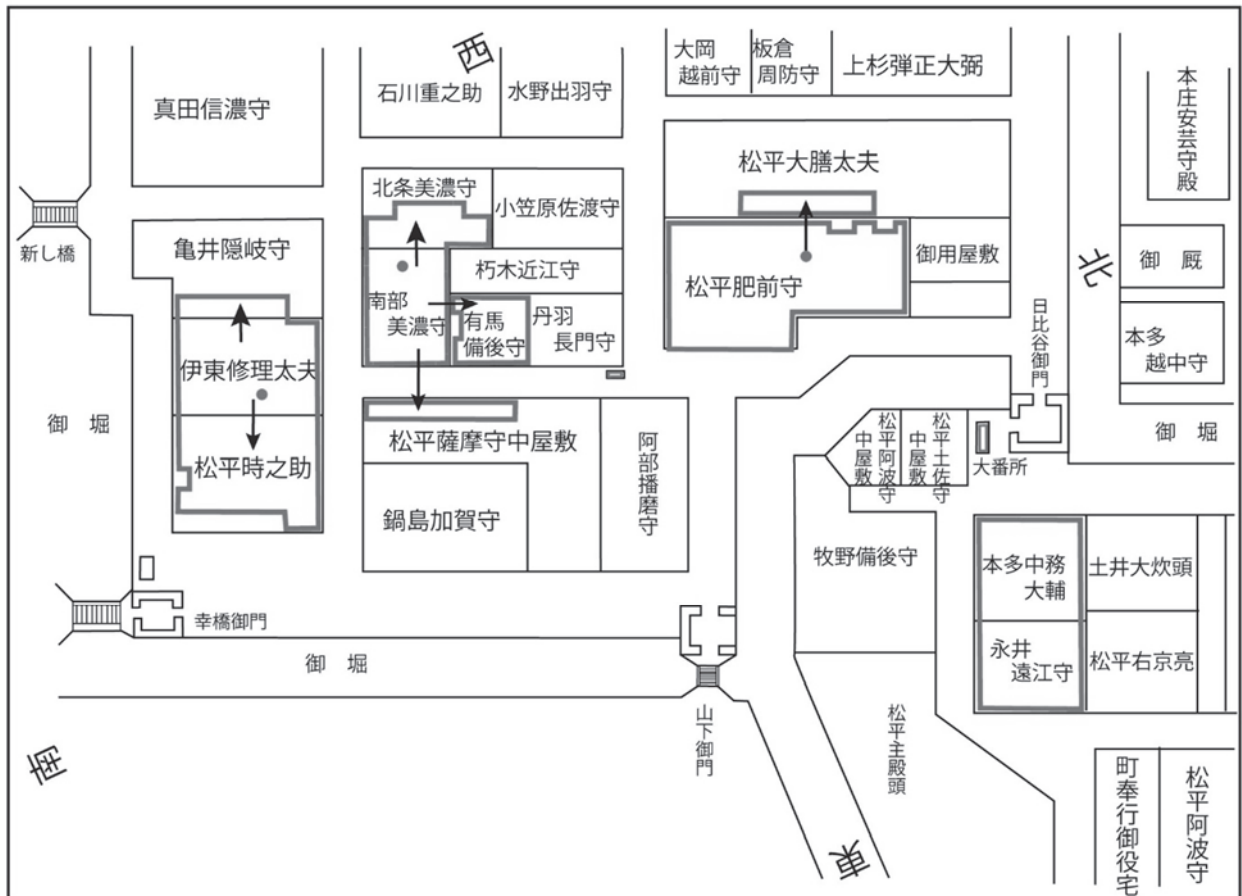


図5. 御曲輪内および外桜田辺の火災の状況-2 (図4左端の続き)

Fig. 5. The detail of burned areas in the inside of Okuruwa and the outer area of Sakurada gate-2. The left continuation of Fig. 4. See captions of Fig. 4.

日比谷公園(C-5, 幸橋御門内)ではさらに大きな火災が発生した。南部美濃守上屋敷(陸奥盛岡藩)と有

馬備後守上屋敷(下野吹上藩)が周囲の屋敷を巻き込んで焼失した。盛岡藩の史料(t)には「御上屋敷御殿不残潰れ候テ長屋通も相潰れ御近辺方出火有之御屋敷よりも出火ニ付御上屋舗不残御焼失相成」とある。盛岡藩の屋敷から出火し、残らず焼失したと記録している。近辺の出火とは松平肥前守屋敷あるいは伊東修理大夫屋敷を指すものと考えられる。南部家の北に位置する有馬備後守上屋敷(下野吹上藩)は(v)に「御居屋敷大破潰之上御類焼二而、死人拾九人 馬六疋有之旨御届之由、有馬備後守様」とあり、盛岡藩上屋敷からのもらい火で屋敷のほとんどが焼けてしまった。また、西側には北条美濃守上屋敷(河内狭山藩)があり、(o)に「御類焼 北条美濃守様」、(t)に「隣北条侯邸の火災亦覆来る依て御作事所へ人を馳て鋸切を以て乱材を剪断然れども」とある。北条家は南部家からの火で類焼したが、その火が再度戻って南部家は悪戦苦闘するほど、この火災は激しい。

さらに(t)には「朽木侯邸の火近く餘炎類に及ぶ又公邸も三四ヶ所方火起る此時既に御台所の火熾に燃邸中火四方に延焼す」とある。南部家の北隣の朽木近江守(丹波福知山藩)上屋敷は三方向が火の海であったが、一部類焼、屋敷全体の焼失は免れた。(d)では全く焼けていない。

道を隔てた東隣の鹿兒島藩の文書(j)によると「一御家老御長屋 一西御長屋 右武行焼失」で、松平薩摩守中屋敷の家老長屋と西長屋が焼失したことが分かる。こちらは(d)と整合する。南部家から出火した火は、周囲三家を巻き込んだことになる。

内幸町 1~2 丁目(C-6, 幸橋御門内)にあった伊東修理大夫上屋敷(日向鉄肥藩)と松平時之助上屋敷(大和郡山藩)そして亀井隠岐守上屋敷(石見津和野藩)を見る。(d)では上記二屋敷と亀井隠岐守上屋敷の一部が焼けている。(s)には「幸橋御門内は柳沢時之助様、伊東修理大夫様、亀井隠岐守様中御長屋一棟焼る 爰にて止る」とあり、三屋敷が焼けた(d)と整合する。

(o)には「外桜田辺火炎盛二相見候付火元見差出候処伊東修理大夫様出火、其向寄諸家大火二而桜田御屋敷(松平肥前守上屋敷のこと)火移り燃上り候趣依之早速御同勢可被差出ニ付及手当候処」、「御類焼 亀井隠岐守様」となっている。鹿嶋藩上屋敷は青山(六本木)にあり、幸橋御門からは遠い。外桜田辺の火炎が大きくなったので、鍋島本家(松平肥前守)や同じ分家筋にあたる鍋島加賀守の肥前小城藩上屋敷が外桜田にあることから、火元見(江戸時代火災の現場に出張し火元を見届けて報告する役)を出して火災の確認を行った。

伊東修理大夫家は(β)に「外桜田亀井隠岐守居屋舗境長屋潰方出火仕、直様私居屋舗西側境長屋江火移、住居向始表門其外長屋不残類焼仕候、此段

御届申上候 十月三日 伊東修理大夫」と亀井家からのもらい火であると、幕府に届けている。

一方、亀井隠岐守家史料(w)は「十月二日江戸大地震御屋敷内御殿向始御長屋大破表長屋潰れ焼失(中略)一裏小屋 御日記蔵潰れ焼失」とそのままを記している。(d)では両家の境を出火点としているが、それぞれの屋敷の焼失面積の差などから、伊東修理大夫家から出火し、松平時之助屋敷と亀井隠岐守屋敷に類焼したものとした。

4.4 小川町(神田神保町)

神田神保町 1 丁目(C-7, 小川町)にあった堀田備中守上屋敷(下総佐倉藩)の火災を見る。この一帯は大名家の上屋敷や旗本の屋敷が多く存在したところである。揺れが強く、広い範囲が焼失した(図 6)。(d)には焼失範囲は示されているが、出火点については全く触れられていない。

堀田家の出火については所領での史料(x)に「十月四日 天気ヨシ霜フル西風佐倉役所江書付上ル江戸御上屋舗ツブレ御殿様寝込ノ儘御取刀ニテカケ出ル直ニ焼失ニナルト言飛却来ル」、「十月八日(中略)江戸殿様上屋舗ツフル直ニ焼ル殿様寝込ノ儘御本丸江登城」とある。豊田家は佐倉藩成田村の名主である。十月四日と八日に江戸屋敷の情報が佐倉に届いたことがわかる。地震後夜の内に堀田は自分で歩けたのか、運んで貰ったのか兎に角登城した。翌日上屋敷は既に全焼だったので、下渋谷村の下屋敷(渋谷区広尾の日赤病院)に入り、8 日まで登城できなかった[北原(2004)]。

さらに詳しい記録が(1)に「堀田備中守殿小川町在住の節地震にて屋敷悉く潰れ当主崩家の下にならる其時陸尺伝蔵平右衛門といふ者兩人駈来り家根瓦を取り除け漸救ひ出したりまた侯僅に足を怪我致されけれ共其儘登城有之尤此夜は御用召御内意故奥表共御用書物調にて灯火炭火等も沢山に有之ゆへ直に出火となり当主留守中に屋敷不残焼失事鎮て後右陸尺伝蔵平右衛門二百石宛被下無役の者に被召出しとなん」とある。この文書が誰の編纂によるものか不明であるが、地震直前に幕府から内々に出頭するよう命令があったことになる。深夜に急いで書類点検の必要に迫られ、照明と暖房を沢山使用中で出火し易かったと考えられる。

千葉県内務部(1922)の堀田正睦の評伝にも「安政二年十月三日突如として閣老連署の召命あり(中略)正睦は即ち幕閣の首相たるべき榮任を辱うせしなり」とあり、前記(1)を裏付ける内容となっている。堀田正睦は公式には十月九日に阿部伊勢守の推挙で老中に再任されている[北原(2004)]。正睦を救った二人の無役の家来は二百石を貰えた。堀田の上屋敷は大きく潰れ、邸内から火災を起こした。怪我を負って正式な老中就任も若干遅延したのだろう。(d)に

ない出火点を図6には追加した。

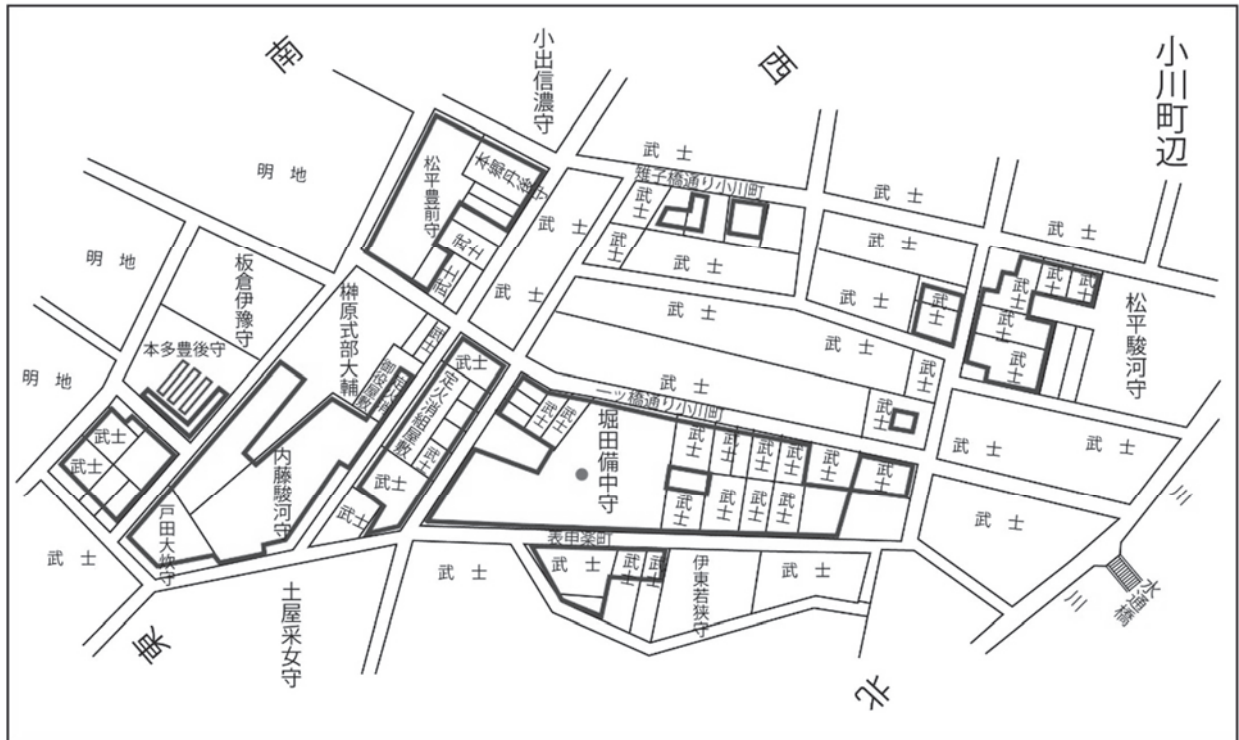


図6. 小川町辺の火災の状況。〔(d)の p.236 に1出火点を追加。〕

Fig. 6. The detail of burned areas around Ogawa-cho. See captions of Fig. 4. One fire origin point is added to the figure of (d)-p.236.

§5. その他の事項

5.1 消火活動

水戸藩上屋敷と松平相模守屋敷（鳥取藩）の消火活動については既に述べた。その他に市中の活動について述べる。

(c) に「神田佐久間町 同所隣町人数並藤堂佐竹生駒三家の人数にて鎮す」とある。佐久間町は千代田区佐久間町 3 丁目あたりで、秋葉原駅の東、神田川の北沿いの町である。町方の火災を、藤堂和泉守（伊勢津藩）と佐竹右京大夫（出羽久保田藩）そして生駒（矢島藩）の家中が協力して消した、と記録している。藤堂家は佐久間町のすぐ北側、佐竹家は台東 3 丁目佐竹通り付近、生駒家は台東二丁目の竹町金比羅神社付近と、いずれも佐久間町から徒歩 10 分以内の北側に屋敷があった。延焼防止に初期消火に加勢したと考えられる。別史料には消火に尽力したのが佐竹・立花両家になっているものもある。しかし、立花家は東上野 1 丁目佐久間町から 1 km 以上離れている。北隣の藤堂が動かない時に、上野広小路付近の火事の方がよほど近く気になるはずの立花が佐久間町消火に出動するのか、疑問である。『武江地動之記』の異本検討などを行う際には、こうした記述内容の合理性を、地理的にも検討することが重要である。

因みに佐久間町は、大正関東震災時にも町内の水路の水を生かした長時間のバケツリレーでみごとに周

囲からの延焼を防いで焼失を逃れた。類焼防止に重要な消火用水の確保ができる地の利がある町は、安政期にも、大勢の協力があれば、延焼防止に成功していたことは、災害教訓として重要である。

5.2 広小路は機能したか

火災の延焼を防ぐ目的で、幕府は広小路を作った。その一つである上野広小路周辺の上野町は安政江戸地震で広く焼失した。図 2 は下谷辺で、現在の外神田 5 丁目（千代田区）から上野 3～6 丁目（台東区）に広がる場所である。南北に御成街道、上野広小路が続き町を東西に分けている。

地震後に「上野広小路東側中ほどより失火」(s) とあるように、旧上野町一丁目の町屋と小役人屋敷から出火した。図 2 にあるように上野町一丁目、二丁目、上野北大門町、上野町元黒門町などが焼失した。しかし、その火は上野広小路をはさんで西側の上野北大門町、上野町元黒門町へは延焼をしていない。同様に御成街道をはさんで、井上筑後守屋敷の火が上野新黒門町町屋や石川主殿頭屋敷には及んでいない。

小川町辺（千代田区神田神保町）も大きく焼失した。図 6 をみると、図中央に堀田備中守上屋敷（下総佐倉藩）があり、堀田屋敷と周辺の武家屋敷が広く焼けているが、南北に通る一ツ橋通りを挟んだ西側の武家屋敷は殆ど火災に合わず残っている。一ツ橋通の

空間が火災の延焼を妨げた可能性が高い。

大名小路も同様に広い道路が通っている(図4)。鳥取藩の(k)によれば上屋敷周辺通路は「巾八間余」とある。即ち八代洲河岸も含めて約15mの空間があ

ったことが分かる。この位の道幅があつて、著しい飛び火を起こさない程度の風であれば、延焼を防ぐことができそうである。



図7. お救い小屋の位置.

被害の大きかった地域の近くに5ヶ所建てた。縦の文字は江戸期の地域名。[北原(2004)に追加]

Fig. 7. Location of the salvation huts for victims [added to Kitahara (2004)]

Five were established near heavily damaged areas. Place names at that time are shown in blue characters.

5.3 発生後の幕府の対応

幕府は地震の直後(恐らく1時間後位)に南町奉行所に対策本部を立ち上げた。そして9項目の救済案をつかって実行に移していった。その上位に、家を失った人々を救う施策があった。炊き出し握り飯の配布、御救い小屋を建てる、怪我人を救療すること等(a)である。炊き出しは当日から、お救い小屋は十月五日から入居がはじまった。炊出し所は上野大門町、牛込神楽坂穴八幡御旅所、芝神明宮境内、深川永代寺(c)であった。また、御救小屋を5ヶ所に建てたが、その位置は大火災のあった場所に近いところであった(図7)。浅草東仲町広小路、上野山下火除地、深川海辺

新田、深川永代寺境内、そして幸橋門外火除地(c)である。これらの場所は、倒潰、焼失した家屋を片付ける必要の無い空間であり、小屋の設置が復旧の妨げにならない所でもあった。幕府の危機管理は行き届いたものであった。

また、出火元の処罰について、町方については「十月十四日火元の町々北御奉行所江被召出、天災の事に付御咎の儀に及れざる旨を令せらる。」(c)と、奉行所の計らいは寛大なものだった。

§6. おわりに

近代以降、安政江戸地震直後の江戸で火災の火

元となったのは、長らく三十数ヶ所とされてきた。斎藤月岑は 50～60 箇所と思っていた。東京大学地震研究所(1985)p.257 に(d)の江戸全体図と称して、出火地点として 40 箇所が示されている(付録 1)。今回は出火点が(d)で示されていない焼失域なども、他の史料を用いたことによって、合計 65 箇所の出火点を特定した。出火点の情報がなく孤立しているように見える焼失域も図 1 で 5 群以上残っているの、火元は従来の通説の倍、月岑の概数より更に多かったことが確実である。

この地震は、風が弱く、炊事の火種が多くない時間帯であったため、江戸での火災被害は軽く、延焼面積が狭かった、としてよく知られており、今回の半行程の火元数の通説に異論は少なかった。今回、従来の震度判定作業などの過程で系統的に整理していた地点ごとの情報を、最初に示した信頼できる三史料の火災情報を軸として吟味することによって、出火箇所が従来から倍増した。

その結果、火災を出したのは地盤が悪い、従って震度が大きい地域が多いことが明確となった(図 1, 表 1)。特に一繋がりになった焼失域に多数の出火点が判明している領域は、東京の低地帯の中でも地盤の悪い地域であることが図 1 からも明白である。一度に狭い領域で何箇所からも火の手が上がると、初期消火に失敗しがちであることは、現代にも通じる教訓となるだろう。

城東山人は地震の後、半鐘の音が聞こえたので「屋の上によち登りて見れば、東は本所、巽は深川、西は丸の内、乾は小川町、南は京橋の辺り北は下谷、艮は千住、吉原、浅草、すべて火の口はたちばかり見ゆ」(7)と記しており、20 口程度の火災を確認した。また、「江戸に十八所の火事出来て、ひるまは薄暗き所も屋よりあかるくなりぬ、其内二戸田、藤田地震の為ニ死去致ス由申上る」(『落葉の日記』)と水戸藩奥女中は記録している。このように古くから云われてきた 20～30 余箇所の火元は、実際の出火点数ではなかった。幾つかの火災が集まり、火の筋を形成する。その火柱を江戸の人たちは「火口」と呼んだ。数十の火口の数、そのまま出火点数として近現代で誤解されてきたようだ。今回火元の数として火口の倍以上が判明したとは言え、強震による密集した木造建造物の都市での出火点数としては少なく、幸運な例だったと言える。

さらに本論で、御曲輪内から外桜田にあった大名家上屋敷の火災について、出火点から延焼に至る過程が判明した。これらからは、大勢による初期の効果的消火活動に加えて、広小路、広い道路、堀や川なども火災の延焼防止に効果があったことが判る。しかし、それは地震当日の天候、即ちほぼ無風に近い状態が大きく幸いしたことを忘れてはならない。

尚、森下・大窪(2014)は火災が新収版の焼失図

(付録 1)にある 42 箇所から平均的季節風向によって北・北西から南・南東方向に主として延焼したと仮定した検討を行い、水路や広い道路などが焼け止まりに効果があったとしている。しかし、火炎の写生図[e.g. 松浦・中村(2023)]などからも、火災が巻き起こす風よりも強そうな気象風の影響は、地震当夜は小さかったと推測される。今回彼らが使用したものより 1.5 倍以上と判明した出火点と焼失域との分布(図 1)からは、必ずしも南・南東への延焼が卓越してはいない。例えば、神田佐久間町は北側の現台東区域の武家から大勢の加勢があつて消火に成功している。延焼が南方向のみとは限らないことを心配してこそその行動だったであろう。

火除け地に関しても、例えば図 6 の堀田家からの火事は、南側の明地(=火除け地)より北側の板倉邸より北側で焼け止まっている。小川町の焼け止まりに必ずしも火除け地だけが有効だった訳ではない。彼らの論考とは合わない。もし風が強かったなら、水路や広小路が十分延焼防止に機能したのだろうか。それらの効果と飛び火の威力とを定量的に評価せず、限られた出火点と、仮定した季節風だけから安政江戸地震の火災状況を解析しても、現代に有効な教訓を導き出せない。個々の消火や延焼にまつわる史料記述などからは、消火を阻み、火災を広げる要因として、南部藩の苦闘にも見られたように、建物倒壊の集中が考慮されるべきである。歴史災害の教訓を現代に生かすには、災害の拡大と抑制の両要因を重要なものから正しく押さえていくことが重要である。

この地震は太陽暦の 11 月 11 日に発生している。立冬直後ではあったが、現在よりは冷涼な気候の時代である。近世末期には社会の進展によって、照明はもちろん、暖房という火種が大家やインテリ達の家では夜遅くても意外に多く存在していたことは、4.2 節の酒井家や 4.4 節の堀田家の具体例からも判る。地震後に戦支度で登城した大名もいたほど[e.g. 北原(2004)]、開国派の攘夷派に対する巻き返しによって、中庸だった阿部正弘の老中首座退任が実質的に決した直後という緊迫した状況の江戸では、夜更けの地震時に、まだ起きていた人も意外に多かった。逆にこれが今回火元をかなり特定できる史料が残された原因でもある。

幕末の地震で斎藤月岑の様に自分で情報を収集した人による書だけでなく、噂や別書からの転記などの情報も入れれば、出火点は更に増える可能性はある。しかし、表 2 に示した様に、写しによって同じ原本史料でさえも焼失域や出火点は若干異なる。まして世間受けする扇情的内容で部数を伸ばそうと、現代で言えば週刊誌風の噂話満載を厭わない多数の史料の山から、本当の火元を特定する作業は容易ではない。今回は情報自体の信憑性が担保できる 3 史料を中心に、従来の火口数からほぼ倍増した確度の高い

出火点のみを取りまとめた。

謝 辞

本研究の一部は、東京大学地震研究所共同利用(2022-D-12)の援助を受け、文部科学省の委託を受けて実施された歴史地震の系統的解析結果も利用した。東京大学史料編纂所杉森玲子教授には齋藤月岑の別号、落款、蔵書印を、早稲田大学山田眞名誉教授には大熊喜邦の講演録を、北原糸子氏には『落葉の日記』を、それぞれ御教示いただいた。編集担当の加納靖之氏と、匿名の査読者2名の意見で本稿は改善された。記して感謝する。

対象地震:1855年安政江戸地震

文 献

千葉県内務部, 1922, 正睦再度の入閣, 堀田正睦, 昭文堂刊, 第2章, 11-13.
 江戸叢書刊行会, 1917, 武江地動之記, 江戸叢書, 9, 1-65.
 北小路健, 1979, 水戸藩奥女中の日記(中), 一新史料「落葉の日記」について, 歴史と旅, 二月号, 274-279.
 北原糸子, 2004, 第2章 災害の社会像, 1855 安政江戸地震報告書, 中央防災会議, 災害教訓の継承に関する専門調査会, 43-127, 内閣府.
 松浦律子・中村操, 2023, 1855年安政江戸地震火災の彩色写生画について, 歴史地震, 38, 51-62.
 森嘉兵衛, 1970, 飢饉 悪疫序, 日本庶民生活史料集成, 7, 三一書房刊, 1-6.
 森下雄治・大窪健之, 2014, 安政江戸地震における地震火災に関する研究-江戸の都市防火体制に

着目して-, 地域安全学会論文集, 22, 11-21.
 中村操・茅野一郎・松浦律子, 2005, 安政江戸地震(1855)の江戸市中の焼失面積の推定, 歴史地震, 第20号, 223-232.
 中村操・松浦律子, 2011, 1855年安政江戸地震の被害と詳細震度分布, 歴史地震, 第26号, 33-64.
 野口武彦, 1997, 安政江戸地震, 災害と政治権力, 筑摩書房
 武者金吉, 1951, 日本地震史料, 毎日新聞社刊, pp.757.
 大熊喜邦, 1924, 安政の大地震と大正震火災, 建築雑誌, No.449, 67-76.
 佐山守, 1973, 安政江戸地震災害誌, 上巻, pp.85, 東京都.
 関谷溥・後藤美智子, 1961, 武江地動之記, 日本庶民生活史料集成, 7, 三一書房刊, 183-205.
 小学館, 1994, 日本大百科全書, 全25巻 (Japan Knowledge で最新電子版閲覧可能).
 丹野美子・高山慶子, 2008, 齋藤月岑編著『安政見聞誌』について, 東京都江戸東京博物館研究報告, 第14号, 125-150, 江戸東京博物館.
 東京大学地震研究所, 1985, 新収日本地震史料, 第5巻別巻2, pp.1931.
 東京大学地震研究所, 1989, 新収日本地震史料, 補遺別巻, pp.992.
 東京大学地震研究所, 1994, 新収日本地震史料, 続補遺別巻, pp.1228.
 東京大学史料編纂所, 1996, 東京大学史料編纂所報, 史料編纂 刊行物紹介 大日本古記録 齋藤月岑日記一, 32, 24-26.
 宇佐美龍夫・他, 2013, 日本被害地震総覧 [599]-2012, 東京大学出版会.

表 2. 三種の『安政火災焼失図』の差異。

Table 2. Differences among three copies of “Ansei Kasai Shoushitsu Zu.”

項目	絵図タイトル	地点	ERI (1985)	江戸博版	地災撮要8
	素性		神宮文庫蔵を複製製図	刊行向け齊藤家蔵の写し	明治21年帝大所蔵写し
	発火点数合計		42 40	41	41
2図	小川町辺焼失範囲	表猿楽町荒川家 岡部邸東三角部分	1軒焼けず 焼け	1軒焼 焼けず	写し方不整合で判断不可 焼けず
3図	小石川辺	野中邸出火点	野中邸 ¹	野中邸 ¹	出火点無し
16図	永代橋向南方	久右衛門新田焼失域	焼けず	焼け	焼け
21図	鉄砲洲辺 発火点	松平淡路守屋敷	屋敷内 ¹	出火点無し	屋敷内 ¹
22図	鍛冶橋御門外中橋辺	河岸地	出火点 ¹	出火点無し	出火点無し

下線を引いた方を推奨。*新収全体図では番場町, 永代門前町計2箇所不足, 御船蔵前町1個過多, 鍛冶橋御門外の不足1箇所は虫食い誤認箇所なので追加不要。

The underlined items are recommended to use. *Origins in S-4 and S-9 are missing, one in K-1 is excessive. The one outside the Kajibashi-gate is the misidentified of an insect hole as a fire origin.

付録 1. 『安政地震焼失図』3 種の相違

現存する 3 系統の焼失図の差異を比較した結果を後日のためにここに記す。但し神宮文庫蔵本は東京大学(1985)作成のために翻刻者が利用した史料写真の複写機コピーを製本したもの(以下**神宮蔵本**)で確認した。**神宮蔵本**は、神宮文庫の「徳川史料」というカテゴリーの中に含まれていた様である。

江戸東京博物館所蔵本(以下**江戸博蔵本**)の詳細は松浦・中村(2023)に譲るが、刊行を目論んで作成された『武江地動之記』等安政江戸地震関係の斎藤月岑収集作成資料の写し、と推定される。

『地災撮要』は、震災予防調査会成立以前の 1888 年に、帝国大学の地震学の教授と、内務省地理局の験震課長とを兼務していた関谷清景が、地震や噴火災害関係で当時既に関谷の元に集まっていた史料群を東京図書館の手島館長の委託によって 1888 年に書写させて東京図書館に収めた書写集で、14 巻現存している。東京大学地震学教室関係の残存資料の中には、この原本と思しきものは発見されていない。東京図書館は、東京書籍館の後身、帝国図書館の前身であり、上野にあった。後に武者金吉が増訂の編纂のためにもっぱら調査したところでもある。戦後帝国図書館は国立国会図書館となった。現在は国会図書館デジタルコレクションの古典籍資料としてウェブで閲覧可能である。第 8 巻は『武江震災記畧』という史料の 2 巻目である(以下**記畧版**)。『武江震災記畧』は三部構成で、一部は所謂『武江地動之記』の調査結果文章のやや短いもの、二部が奉行所調査による焼失図の写し部分である。**江戸博蔵本**の『安政見聞誌』と同様『武江地動之記』の異本である。

これら焼失図 3 種を比較すると、6 箇所では不一致が見られた(表 2)。まず**二図小川町辺**で、2 箇所異なる。**神宮蔵本**では現錦華通り沿い表猿楽町の武家荒川常次郎邸が 1 軒焼けておらず、現靖国通り交差点横にあたる岡部因幡守邸全体が焼けている。**江戸博蔵本**では荒川邸が焼け、岡部邸東端三角地は焼けずとなっている。**記畧版**は複写が一区画ごとに焼失は赤線で囲ってあるが、荒川邸に関しては不鮮明であり、焼失か否か判断できない。三角地は**江戸博蔵本**と同等岡部邸の一部が焼け残っている。これらの違いでどちらが実際だったかは、今回は判断しないが、この差異で焼失面積が大きく変わることはない。

次に異なるのは**三図小石川辺**の出火点である。**記畧版**だけ野中邸など図中に出火点が無い。これは**神宮蔵本**のままで良いと判断した。同様に**図二十一鉄砲洲辺**では**江戸博蔵本**だけ松平淡路守屋敷内に出火点が無い。これは**神宮蔵本**のままで良いと判断した。**十六図永代橋向南方**で、久右衛門新田の中に焼失域が**神宮蔵本**だけが欠けている。久右衛門新田内にも焼失域があったと考える。

図二十二鍛冶橋御門外中橋辺では、新収の印刷

版にだけ河岸地に出火点がある。**江戸博蔵本**と**記畧版**は出火点無しで一致していた。**神宮蔵本**に戻ると、前後の頁の該当部分に連続して黒点が続くのが判る。新収編集時に原典の虫喰穴を出火点と誤認したものと判断した。

一応新収の焼失域全図の誤謬もここに記しておく。元の史料『安政焼失図』には、23 図に分かれた切り絵図風の江戸の市域図面に合計で 41 箇所の出火点が記録されており、新収では虫喰い穴を誤認して 1 個増えた 42 個の出火点が打たれている。新収の p.257 には焼失図を江戸全体の図にまとめたとされる図がある。この全図は当然元の史料には無く、新収の編者が作成した資料である。出火点は 40 しか記載されていない。S-4 番場町と K-9 黒江町でそれぞれ 1 ずつ**神宮蔵本**にある出火点が記載されていない。また、何故か前項の虫喰誤認の出火点が全図では記載されていない。さらに、K-1 御船蔵前町が**神宮蔵本**には黒丸 1 個であるが 2 個記載されている。

焼失域や地点を現代の地図に落とす場合は、江戸切絵図などと同様に、方位や距離感は史料図面では正確さを欠くので、当時の地名と現在の町丁目などを注意深く照合しないと図 1 の様に焼失域を現在の地図上に転記するのは困難である。既に中村・ほか(2005)や本論の図 1 に現在の地図上での位置精度を上げて示されているので、特に新収版全体図の正誤図は作らなかった。

尚、森下・大窪(2014)は出火点数を 42 余箇所としているが、根拠史料は今回我々が利用しなかった派生刊行物系統の史料の一部「**四十二口**」を「42 余箇所」の出火点と解釈し、同じ史料中の 58 という火元としては最大値の情報は無視しているほか、虫喰い誤認箇所も無視している。

付録 2. 『武江地動之記』の異本について

歴史地震研究者がよく使う地震史料集では、武者(1951)に『武江地動之記』の文章部分が含まれている。これは多少の誤字脱字が見受けられるが、比較すると、江戸叢書の翻刻本から写した可能性が高い。江戸叢書の底本や翻刻者は不明である。江戸叢書刊行会のメンバーを見る限り、徳川家伝来の史料にあった写本の可能性が伺える程度である。武者が前述の上野の帝国図書館で閲覧可能な刊行本を中心に地震史料集を編んだことを考えれば、刊行本の江戸叢書が底本という推測は十分蓋然性が高い。

我々は、関谷・後藤(1970)を本論では利用することに決めた。彼らの底本が明確で、底本をネット経由で画像閲覧することもできる。更に松浦・中村(2023)に付図で示した様に、底本である都立図書館蔵本の冊子には、原著者斎藤月岑の蔵書印が押されている。原著に近いことが確実であるので、諸説有る中で関谷・後藤(1970)に依ったのである。

そもそも『武江地動之記』は異本が多い。例えば丹野が発見し、江戸東京博物館蔵となった『安政見聞誌』というタイトルの冊子も『武江地動之記』の異本部分が含まれる。付録 1 に記した『地災撮要』の巻七にも『武江震災記畧一』として、情報量が減ってはいるものの、ほぼ同内容を含む史料がある。

庭園関係の蔵書で有名な小澤文庫は、現在殆どが国会図書館蔵となっているが、かつてその中には

『武江震災記畧』という本が存在していた。この本が『地災撮要』の底本の可能性がある。現在は小澤文庫のこの史料は筑波大学蔵となっている様である。異本検討などの際には確認すると良い。残念ながら国会図書館蔵本の『武江地動之記』の史料確認も、今回我々の手が回らなかった。これらは後考に任せるが、本論で都立図書館蔵本を底本とするものに依ったことは、火災の検討に十分有意義であったと考える。

付表 1. 火災検討に用いた史料

Table A1. List of Historical Materials used in this study

Mark	史料名 Name of materials	備考 Remarks	史料集と頁	
			Vol.	Page
a	『安政大地震実験談』	奉行所与力佐久間長敬(当時19才)の地震時の行政側から見た個人の記録	ii	466-476
b	『安政乙卯地震紀聞』	国立公文書館蔵の宮崎成身『視聴草』の地震関連部分	ii	443
c	『安政乙卯 武江地動之記』	斎藤月岑著	i	567-581
d	『安政地震焼失図』	北町奉行所の江戸地震火災調査報告書	ii	233-257
e	『安政度地震大風之記』	東大総合図書館蔵『安政地震大風之記』であろう	ii	271
f	『安政二乙卯日記 御在府年 地』	長門萩藩毛利大膳大夫敬親家の日記	ii	1081
g	『安政二卯年十月辰中刻大地震 附 所々火災』	豊後府内藩家老・岡本家の文書	ii	477
h	『安政二年乙卯草稿』	越前福井藩松平越前守慶永家の幕府への報告文書。福井藩上屋敷は大名小路の中では地盤の良い所(大手町二丁目)にあり被害小であったので他の大名の被害をよく見ている。中屋敷は酒井雅楽頭上屋敷に隣接しており火災の推移についても詳しい	ii	807 810
i	『江戸大地震出火明細記』	安政江戸地震災害誌 上巻	iii	76
j	『江戸表地震出火之次第』	鹿児島藩邸全体の地震火災被害文書	v	1172
k	『江戸御留守居日記』	因幡鳥取藩の御留守居役の日記	ii	922
l	『江戸中諸屋敷 地震奇談録』	地震研究所・石本文庫	ii	509
m	『御写物』	越前福井藩松平越前守慶永家の藩政史料。他藩の幕府への被害報告の写し	ii	795-802
n	『小見川藩仙台陣屋日記』	下総小見川藩陣屋の日記	v	1080
o	『鹿嶋藩日記』	肥前鹿島藩松平(鍋島)家の藩政日記。肥前小城藩(鍋島加賀守)とは共に肥前佐賀藩(松平肥前守)の支藩	iv	771-772
p	『見聞略記』	筑前福岡藩松平(黒田)美濃守齊溥家の江戸屋敷から国元への地震文書	iv	659
q	『酒井家史料 日記』	播磨姫路藩酒井雅楽守家の日記。大名小路の大火災に直面し自家の地震被害・火災の発生については最も詳しく記録している	iv	689
r	『時雨廻袖』	畑銀鷄著の江戸の被害の記録	i	599-613
s	『地震類焼場所明細之写』	石本文庫の木版史料	iii	58-61
t	『諸書抜』	陸奥盛岡藩の藩政史料	v	1077
u	『書簡 江戸から国元』	越後村上藩の藩士の書簡	v	1089
v	『震災動揺集』	石見浜田藩松平右近将監(うこんしょうげん)武聡家の地震日誌 老中久世大和守のもとに提出された被害届の写し	i	546
w	『津和野亀井記 五』	石見津和野藩亀井隠岐守家の藩政史料	v	1143
x	『豊田家日記』	下総国埴生郡成田村(現成田市幸町)の名主豊田家の日記	ii	1716-1717
y	『部 寄』	長門萩藩毛利大膳大夫敬親家の藩政史料	ii	1021
z	『別本 藤岡屋日記 上』	江戸・外神田の古本屋由蔵の編纂した安政江戸地震関連の史料集	ii	332, 338
α	『細川家旧記』	(財)永青文庫蔵 肥後熊本藩細川越中守家文書。上屋敷は大名小路の中では地盤の良い所(大手町二丁目)にあり被害小であったので他の大名の被害をよく見ている	v	1166-1167
β	『奉札留』	豊後府内藩 松平左衛門尉(さえものじょう)近説家の藩政史料。他藩の幕府への被害報告の写し 奉札とは留守居書状のこと。留守居役が情報交換に使った書状の受書(野口, 1997:88p.)	ii	38 43 48
γ	『破窓の記』	城東山人著の地震日記	i	500-502
δ	『里正日誌』	蔵敷村(東大和市蔵敷)の名主内藤左衛門の日記	ii	1401-1402

史料集は i 日本地震史料, ii 新収 5 巻別巻 2, iii 佐山(1975), iv 新収補遺別巻, v 新収続補遺別巻と略記 In Vol. column, each archive volume of published historical materials is shown by Roman numerals as follows: i Musha (1951), ii ERI(1985), iii Sayama (1975), iv ERI (1989), and v ERI (1994).

付表 2. 出火点位置に関する記述

Table A2. Information on each origin of fire in historical materials.

現代の地名	当時の地名	図面 No.	出火点に関する記事	史料集頁
千代田区	大手町	酒井雅樂守上屋敷	C-1 御曲輪内 酒井雅樂守上屋敷 (黒丸)	ii-235
	皇居外苑	松平肥後守上屋敷	C-2 御曲輪内 松平肥後守上屋敷 (黒丸)	ii-235
	丸の内二丁目	松平相模守添屋敷	C-3 八代洲河岸 松平相模守添屋敷 (黒丸)	ii-235
	日比谷公園	松平肥前守上屋敷	C-4 外桜田 松平肥前守上屋敷 (黒丸)	ii-235
		南部美濃守上屋敷	C-5 外桜田 南部美濃守上屋敷 (黒丸)	ii-235
	内幸町二丁目	伊東修理大夫上屋敷	C-6 外桜田 伊東修理大夫上屋敷、松平時之助上屋敷境界 (黒丸)	ii-235
神田神保町	堀田備中守上屋敷	C-7 十月四日 (中略) 江戸御上屋鋪ツブレ、御殿様寢込ノ儘御取刀ニテカケ出ル、直ニ焼失ニナルト言、飛却来ル 豊田家日記	ii-1717	
中央区	日本橋浜町二丁目	水野出羽守中屋敷	Cu-1 浜町辺 水野出羽守中屋敷、燃立 (黒丸) 浜町中屋敷之儀は住居向ニケ所潰、其外家中長屋向皆潰之内潰家ヨリ出火ニ而長屋三棟土蔵ニケ所焼失 御写物	ii-252 ii-802
	新川一丁目	靈岸島塩町 儀兵衛	Cu-2 靈岸島塩町 此辺より燃立申候 (黒丸) 靈岸島塩町、同四日市町、同銀町六丁目、大川端町、総而一口、此火元塩町家主儀兵衛也 破窓の記	ii-253 i-501
	明石町	松平淡路守上屋敷	Cu-3 鉄砲洲辺 十軒町 松平淡路守上屋敷 (黒丸)	ii-254
		十軒町 (亀次郎)	Cu-3 銭砲洲十軒町 松平淡路守殿共一口 此火元十軒町鉄三郎店亀次郎也 破窓の記 とあるが焼失面積から町屋は火元としなかった	i-501
京橋二丁目	南鍛冶町 長兵衛 庄兵衛	Cu-4 鍛冶橋御門外中橋辺 南大工町 町屋 此辺も燃立申候 (黒丸) * ii -255の河岸地にある黒丸は虫喰の誤認で原典や他の写し版にはない、	ii-255	
		Cu-4 南鍛冶町也 此火元南鍛冶町壱丁目 家主長兵衛同町庄兵衛 破窓の記	i-501	
港区	新橋二丁目	兼房町	M-1 兼房町、松平兵部殿屋敷共一口也、缺火元 破窓の記	i-501
	東新橋二丁目	柴井町 月行事房吉	M-2 柴井町、月行事房吉、火元一口也 破窓の記 柴井町木戸際より燃立、同町のみ焼失 武江地動之記	i-501 i-580
文京区後楽二丁目	野中鉄太郎	B-1 小石川辺 隆慶橋南方 清水御用人野中鉄太郎 (黒丸)	ii-237	
台東区	千束四丁目	新吉原江戸町二丁目 松五郎 幸吉	T-1 新吉原五ヶ町、并五十軒 (南側は/残る) 共、一口也、此火元江戸町二丁目家主松五郎、同町同幸吉兩人也 破窓の記 吉原は江戸町一丁目より燃上る 時雨廻袖抄録	i-501 i-599
			T-1 新吉原壊れ候上江戸町、京町ニケ所より出火、五町不残焼。大門の外五十間高札の側残る 地震類焼場所明細之写	iii-25
	花川戸一丁目	浅草寺地中 小兵衛	T-2 猿若町三町分、浅草田町、山川町、花川戸町、聖天横町、南馬道町、北馬道町、谷中天王寺門前、浅草寺地中町家十八ヶ寺分、一口、此火元浅草寺地中家主小兵衛也 破窓の記	i-501
	今戸二丁目	橋場金座下吹所	T-3 今戸橋場辺 金座下吹所も燃立 (黒丸2)	ii-245
			T-3 橋場町、〈缺火元、〉一口也 破窓の記 橋場金座下吹所より燃立 武江地動之記	i-501 i-580
	今戸一丁目	今戸町 庄八(吉)	T-4 今戸橋場辺 今戸町利兵衛店庄八 (黒丸) 今戸町家主庄吉、火元一口也 破窓の記	ii-245 i-501
	下谷二丁目	下谷坂本町 静安	T-5 下谷坂本辺 下谷坂本町三丁目 右兵衛店静安 燃立 (黒丸)	ii-240
			T-5 //、一口、此火元参丁目五人組持居医師清庵也 破窓の記	i-501
	松が谷一丁目	龍光寺門前 保七	T-6 菊屋橋辺 龍光寺門前 町屋 (黒丸) // 〈龍光寺門前は浅草堂前のほとり也〉家主保七火元一口也 破窓の記	ii-242 i-501
	元浅草四丁目	行安寺門前 喜十郎	T-7 菊屋橋辺 行安寺門前 町屋 燃立 (黒丸) 浅草行安寺門前、〈行安寺門前は、浅草菊屋橋西際也、〉、一口、此火元行安寺門前家主喜十郎也 破窓の記	ii-242 i-501
	寿二丁目	浅草八軒町 玉宗寺	T-8 菊屋橋辺 修福寺末玉宗寺燃立 (黒丸)	ii-242
	駒形一丁目	駒形町 亀次郎	T-9 浅草駒形町辺 孫右衛門地借 亀次郎 (黒丸) 浅草駒形町黒船町諏訪町三好町浅草三軒町同所八軒町総而一口此火元駒形町家主亀次郎三好町同彌兵衛兩人也 破窓の記	ii-243 i-501
	蔵前二丁目	三好町 彌兵衛	T-10 浅草駒形町家主亀次郎三好町同彌兵衛兩人也 破窓の記	i-501
	上野三丁目	上野町一丁目・他	與兵衛	T-11 下谷南大門町、北大門町、同所同朋町、同長者町壱丁目、同式丁目、同所常楽院門前、下谷町壱丁目、上野町、総而一口、火元上野町家主與兵衛也 破窓の記
森川久右衛門 美濃部八蔵		T-11 上野町壱丁目裏森川久右衛門殿組御徒やしきより出火 仲御徒町なる東側御先手美濃部八蔵殿 (中略) 火起こり 武江地動之記		i-570
池之端一丁目	下谷茅町	清兵衛 金七	T-12 下谷茅町二丁目 町屋 此辺より燃立申候 (黒丸2)	ii-239
			T-12 下谷茅町壱丁目式丁目池之端七軒町講安寺門前稱仰院門前其外門前地五六ヶ所総而一口此火元茅町壱丁目家主清兵衛同二丁目同金七 破窓の記	i-501

付表 2. 続き
Table A2 (continued)

現代の地名		当時の地名		図面 No.	出火点に関する記事	史料集頁
台東区	池之端二丁目	池之端七軒町	松蔵	T-13	池之端七軒町 清左衛門店 松蔵 (黒丸)	ii-239
					池の端七軒町同清左衛門 破窓の記	i-501
					池の端七軒町より燃立。武江地動之記	i-580
荒川区南千住七丁目		小塚原町三輪町飛地		A-1	小塚原町、三ノ輪町飛地、此辺より燃立申候、(黒丸)	ii-241
					千住 小塚原町、一口也、缺火元 破窓の記	i-501
墨田区	向島一丁目	南本所元瓦町	新蔵	S-1	小梅瓦町辺 南本所元瓦町 町屋 (黒丸)	ii-247
					南本所元瓦町、同所小梅瓦町、一口、火元は元瓦町家主新蔵也 破窓の記	i-501
	吾妻橋一丁目	中之郷竹町 松平周防守下屋敷		S-2	本所中之郷竹町、同統松平周防守殿下屋敷共、一口也。缺火元 破窓の記	i-501
	東駒形二丁目	北本所荒井町	忠太郎	S-3	南北本所番場町荒井町辺 荒井町 町屋 (黒丸)	ii-246
	東駒形一丁目	北本所番場町	新八	S-4	南本所番場町、北本所番場町、同所荒井町、総而一口、此火元南本所番場町家主新八、荒井町同忠太郎也 破窓の記	i-501
					南北本所番場町荒井町辺 北本所番場町 町屋 (黒丸)	ii-246
	石原町二丁目	南本所石原町	久右衛門	S-5	南本所石原町 町屋 (黒丸)	ii-248
					南本所石原町、火元家主久右衛門、一口也 破窓の記	i-501
	太平一丁目	中之郷出村町		S-6	同所出村町、中之郷出村町、一口也、缺火元 破窓の記	i-501
	緑一丁目	本所緑町一丁目	市五郎	S-7	本所竪川辺 本所緑町一丁目 町屋 (黒丸)	ii-248
	緑三丁目	本所緑町三丁目 五丁目	與兵衛 安兵衛	S-8	本所花町、同所緑町一、二、三、四、五町迄、総而一口、此火元花町家主徳兵衛、緑町一丁目同市五郎、同二丁目與兵衛、同五丁目安兵衛、右四人也 破窓の記	i-501
本所花町 徳兵衛						
緑四丁目	本所入江町		S-9	本所竪川辺 本所入江町 町屋 (黒丸)	ii-248	
立川四丁目	本所徳右衛門町	與兵衛	S-10	本所徳右衛門町町屋、二丁目、一口、此火元二丁目家主與兵衛也 破窓の記	i-501	
江東区	新大橋二丁目	御船蔵前町	勤次郎 久兵衛	K-1	新大橋向 御船蔵森下町辺 御船蔵前町 町屋 (黒丸)	ii-251
					同所六間堀町、同所御船蔵前町、同所森下町、一口、此火元、(中略) 御船蔵前町同勤次郎、同町同久兵衛 破窓の記	i-501
	新大橋三丁目	深川六間堀町	新蔵 勝五郎	K-2	新大橋向六間堀町 六間堀町 町屋 (黒丸)	ii-251
					此火元、六間堀町家主新蔵、同所同勝五郎 破窓の記	i-501
	森下一丁目	森下町	徳右衛門 基四郎	K-3	新大橋向 御船蔵森下町辺 森下町 町屋 (黒丸二つ)	ii-251
					此火元、(中略) 森下町同徳右衛門、同町同基四郎 破窓の記	i-501
	常盤二丁目	深川常盤町		K-4	深川常盤町町屋、二丁目、一口也、缺火元 破窓の記	i-501
	清澄二-三丁目	深川伊勢崎町	市兵衛	K-5	深川伊勢崎町辺 町屋 (黒丸)	ii-250
					同所伊勢崎町、家主市兵衛火元、一口也 破窓の記	i-502
	冬木	深川亀久町	組合金兵衛	K-6	亀久町辺 町屋 (黒丸)	ii-250
					亀久町、家主忠次郎変死に付、組合金兵衛火元一口 破窓の記	i-502
	富岡二丁目	永代寺門前東仲町	金次郎	K-7	永代寺門前町辺 東仲町 (黒丸)	ii-249
					同所永代寺門前、仲町、同門前町、同東仲町、同山本町、一口、此火元永代寺門前町家主竹次郎、同町與兵衛 同所東仲町金次郎 破窓の記	i-502
	門前仲町一-二丁目	永代寺門前町	竹次郎 與兵衛	K-8	永代寺門前町辺 町屋 (黒丸二つ)	ii-249
永代寺門前町辺 山本町 町屋 (黒丸)					ii-249	
富岡一丁目	同門前山本町	金平	K-9	同所山本町同金平 破窓の記	i-502	
				永代寺門前町辺 大島町 黒江町 町屋 (黒丸二つ)	ii-249	
永代一-二丁目	深川熊井町	利八	K-9	同所相川町、熊井町、諸町、富吉町、中島町、大島町、黒江町、蛤町、総て一口、此火元、熊井町家主利八、大島町同幸次郎、黒江町同善兵衛、蛤町同伊右衛門、右四人也 破窓の記	i-502	
	深川黒江町	善兵衛				
	深川蛤町	伊右衛門				
亀戸二丁目	深川大島町	幸次郎	K-10	同所相川町、熊井町、諸町、富吉町、中島町、大島町、黒江町、蛤町、総て一口、此火元、熊井町家主利八、大島町同幸次郎、黒江町同善兵衛、蛤町同伊右衛門、右四人也 破窓の記	i-502	
				亀戸町、一口也。缺火元 破窓の記	i-501	
亀戸六丁目	中之郷五之橋町		K-11	中之郷五の橋町、一口也、缺火元 破窓の記	i-501	

記事の太字は史料名。無いものはすべて(d)。史料集略記は付表 1 参照

Gothic indicates each historical document. In the last column, each archive volume of published historical materials and its page number are shown. i Musha (1951), ii ERI (1985), iii Sayama (1975).